

Nana's Now

ごあいさつ

ホームナースのお仕事

今では全国に5000を超える訪問看護ステーションですが、私が初めてその存在を知ったのは、1986年のことでした。作家の故遠藤周作さんの応援で、日赤の看護婦さん4人が訪問看護の会社を設立したのです。私は結婚したその年から、相ついで母と父の介護に直面したことから、このニュースをとともうれしく受け止めました。

その3年後、岩波新書の「豊かさとは何か」という本の中で、行き届いたドイツの訪問看護について知りました。ドイツは北欧ほど福祉が発展していないと思いますが、看護師の移動のための自動車のガソリン代を国が持つシステムがありました。その後見たオーストラリアの映画「老女物語」にも、がん患者を看守る訪問看護師の姿がありました。日本にもいつ普及するのかと心待ちしていたものです。

それが、それぞれのやりたいこと支援をベースにする「ナナの家」の活動の延長で、2006年10月に「ナナの家」グループに、訪問看護ステーションを開設する運びとなりました。まだ都内にも数が少ない、子どもから見る訪問看護を応援したいと、看護師さんたちが集まってくれました。

お陰で我が家の重度障害者の息子の所にも訪問看護が入るようになりました。看護師さんは、家族の健康の看守り番、“ホームナース”の呼び名がぴったりフィットとと思いました。

ホームナースの訪問で、息子の健康が少しずつ守られるようになりました。息子は車椅子の生活もあって、便秘がひどく、周期性嘔吐症や腸閉塞で入院することが、多い時には毎月のようにありました。それに対して、緩下剤の飲み方を一日2回から3回にしてはどうかと助言され、たったそれだけで、驚いたことに嘔吐症による入院をしなくなりました。他にも改善点は沢山あります。体の異常も早々と発見されます。家族の健康相談にもいつも乗ってもらえます。ドクターの骨太さとは異なり、細やかな対応で病気が重篤になるのを防ぐことが可能となったのです。

この先は余談です……。先日飼い猫が半年ほどぼうこう炎で頻尿に苦しんでいることを話しました。すると「それは石じゃないの?」と言われました。動物病院で早速レントゲンを撮ってもらうと、確かにぼうこうにコンペイ糖型の石が2つ映ったのです。ずーっと病院にかかり、薬を飲んでいても治らないはずでした。診察室ではなく、家庭の中で解決策が見つかっていくのがホームナースの魅力です。

ある日、私の好物のタラの芽が店頭に並んだので、てんぷらにしようと思ってきたところ、「それは季節のものじゃないわねー。」と言われました。確かにそれは石油を使って作られたもの。季節のものが、一番体に優しい食べ物でした。そんな当たり前のことも、改めてホームナースから学びます。我が家のこの頃は、食材選びから息子と家族の健康を考えるようになり、少しずつですが改善されているのを感じます。

在宅医療がますます進む中で、地域医療にホームナースの働きが不可欠だと確信します。看護師さんが、どんどん地域に戻ってきますように! 子どもから看られる看護師さんは、私たちの所に集まりますように!

理事長 皆河える子